
最後のバレンタインデー

日下部良介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後のバレンタインデー

【Nコード】

N8844Q

【作者名】

日下部良介

【あらすじ】

幸一は入学式で一目ぼれした和美が忘れられなかった。しかし彼女は…。

ボクは今年、卒業を控えた中学三年生。入学した時からずっと好きな子がいる。倉沢和美だ。彼女が毎年、バレンタインデーにチョコを渡しているのが長谷川昇。この二人は学校中のだれもが認めるベストカップルなのだ。とてもボクなんか割って入る隙間などまったくない。ずっとそう思っていた。このまま、人知れずボクの初恋は想い出に変わっていくんだ…。

彼女を初めて見かけたのは中学の入学式。出席番号が同じでボクの隣の席にいたのが彼女だ。

「初めまして、倉沢和美です。第三小学校から来ました」そう言っ
てほほ笑んだ彼女の笑顔を今でも覚えてる。

「四小から来た川瀬幸一」ボクは照れくさくて、無愛想に自己紹介
をした。今思えば、これがそもその失敗だった。

彼女は頭も良くてクラス委員になった。背も高かったのでバレ
ーボール部に入部すると、すぐにレギュラーを取った。活発で、
明るい彼女はすぐにクラスの人気者になった。

彼女は分け隔てなく、だれとでも同じように接した。隣の席の
ボクも例外ではなかった。むしろ、席が隣だったので、彼女と接
する機会はボクがいちばん多かったくらいだ。

二学期になると、席替えが行われた。ボクは心の底で願った。

『また、彼女が隣に来てくれますように』願いはあっけなく断
ち切られてしまった。しかも、最悪の形で。

彼女の隣にはクラス委員長でバスケットボール部の長谷川昇。

よりも寄ってボクの目の前の席だ。しばらくの間、二人が仲良
く話をするのを目の前で見なければならぬ。

これを機に、二人の仲は急接近。押しも押されぬベストカップルに祭り上げられてしまった。

和美は正直、戸惑っていた。確かに、長谷川昇は好感のもてる少年だった。しかし、特別な感情は持っていなかったのに、ベストカップルだなんて祭り上げられ、昇もその気になって和美のことを恋人のように振舞うようになったからだ。

周りが和美のことを活発で明るいと思っただけで、クラス委員を引き受けたのも、断り切れなくてしかたなくというのが真相だった。バレーボールは小学校の頃から地元のクラブでやっていて、実業団のジュニアチームに誘われるほどの逸材だったから中学校の部活レベルでは即レギュラーになっても不思議ではなかった。

二学期になって席替えが行われる時に和美は心の中で祈っていた。『また川瀬君の隣になれますように』しかし願いはかなわなかった。しかも、川瀬幸一は自分より後ろの席になってしまった。

これでは、彼の後姿を眺めることもできない。

和美は照れくさそうに自己紹介してくれた幸一の正直そうな感じが好きだった。

そして、三学期になっても和美と昇は隣同士になった。和美にとつて唯一の救いは幸一の席が二列先だったが、和美の席から見える位置だったことだ。幸一は仲良くする二人の姿を見ないで済むと思ひ、少し気が楽になった。

二年になると幸一と和美は違うクラスになった。長谷川昇は和美と同じクラスだった。幸一はちょうどいいきっかけになったと、和美のことは諦めることにした。

一年の後半頃から、和美と昇の噂は他のクラスでも評判になって

いた。バレンタインデーの日には、みんなが期待する中、和美は昇にチヨコレートを渡さざるを得ない状況に追い詰められた。しかし、和美が渡したのは義理チヨコだった。本命のチヨコレートは他に渡したい相手がいたからだ。結局、和美は本命のチヨコを渡すことができないまま、その彼とは二年になって別々のクラスに引き離されてしまったのだ。

バレンタインデーの放課後、クラスの全員が見守る中、和美が昇にチヨコを渡している。和美はチヨコを渡すと、すぐに、教室を出て行った。昇はチヨコを掲げてクラス中に自慢した。幸一はとても見ていられなかったので、早々に学校を後にした。

部活が終わって教室に戻った和美はカバンの中にあるもう一つのチヨコを眺めたため息をついた。そして、昇にチヨコを渡すところを幸一に見られたのではないかと、それが気がかりでならなかった。

二年になっても、二人のポジションは変わらなかった。和美は引くに引けなくてウソの自分を演じるしかなくなっていた。しかし、それも、慣れればさほど苦痛ではなくなっていた。

そして、またバレンタインデーがやって来た。和美は昇にさりげなくチヨコを渡すと、またすぐに教室を出た。出たところで誰かにぶつかってよろけた。転びそうになったが、手を掴まれて転ばずに済んだ。

「大丈夫？」無愛想な物言いで声をかけた幸一の声に和美は安らぎを感じた。お礼を言おうとした時、幸一は既に、廊下の角を曲がって見えなくなっていた。

「やっぱり倉沢さんのことは忘れられそうにないなあ」幸一はそう呟いた。

和美はまた、カバンの中に取り残されたチョコレートを眺めてため息をついた。

三年になると幸一は再び和美と同じクラスになった。しかし、めでたく昇も付いてきた。クラス分けの用紙が張り出されたときに幸一はまず和美の名前を探した。あつた！次に昇の名前が無いことを祈った。あつた…。

幸一はガツカリした。すると、後ろから懐かしい声が聞こえた。「また隣だね。よろしくお願いします」和美だった。幸一はそう言われて出席番号を確認した。幸一も和美も出席番号7番だった。進級して、クラス替えが行われると、一学期の間は出席番号順の席になる。したがって、幸一と和美は少なくとも夏休み前までは隣同士になるのだ。

幸一は飛び上がりたいほど嬉しかったが、とても恥ずかしくてそんなことはできない。

「よろしく」とボソッと和美に言うと、逃げるように教室に入り席に着いた。すぐに、和美が隣の席にやって来た。幸一は和美の顔を見たくて仕方なかったが真っ直ぐ前を向いたまま微動だにできなかった。

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。幸一は女の子と話をするのが苦手だったため、自分から話しかけることはなかったが、和美が話しかけてくれるのがとてもうれしかった。しかし、すぐに夏休みが来てしまった。二学期になったら、また席替えが行われる。

夏休みはあっという間に終わってしまい、すぐに二学期がやって来た。また和美に会えるという喜びと席が離れるという寂しさが

幸一の心を揺らした。そして、席替えの時間。一人ずつ番号が書かれた紙をひていく。幸一は20番。窓際のいちばん後ろだ。「ねえ、川瀬君何番だった？」和美が聞いた。幸一は自分の番号を和美に見せた。

「ビンゴ！」和美は立ち上がってガッツポーズをした。そして、幸一に自分の番号を見せた。20番だった。

幸一は驚いた。和美が自分と同じ番号を引いてガッツポーズをして喜んだのだ。これはひょっとして…。

和美と昇はクラス委員という立場で、学校内では一緒に行動することが多い。まして、部活も引退しているのではなおさらだ。二期は最後の文化祭に向けて特に忙しい。しかし、どういうわけか幸一は文化祭の実行委員に立候補したのだ。幸一にしてみれば小さな抵抗。和美と自分がベストカップルだと疑わない昇は幸一の抵抗を気にも留めなかった。

和美は幸一が文化祭の実行委員に立候補したのにはびっくりした。自分から目立つことをする人ではないのに。

三人の活躍で、文化祭は大成功に終わった。昇の提案で三人で打ち上げをやるうということになった。昇の実家がお好み焼屋だったのでそこでやった。和美は何度か来たことがあるらしく、昇の両親とも仲が良かった。そんな雰囲気の中で、幸一はとても居辛かった。席を立とうとした時、和美が学生服の裾を引っ張った。「せっかくだから、もう少し一緒にいて」和美がそう言うので、幸一はもう少しいることにした。

「そうだよ。ウチのお好み焼きを食ってから帰ってくれよ」昇も幸一を引き留めた。

昇が自慢するだけあって、確かに、ここのお好み焼は美味かった。しかし、幸一は和美のことが気になって、まともに味わうことができず、一気に口の中に放り込んだ。

外に出ると、辺りはすっかり暗くなっていた。

「もう、こんなに暗くなっちゃったね。倉沢さん、大丈夫？送って行くのか？」昇はそういったが、社交辞令的な口調で本気でやっているようには思えなかった。和美は昇の申し出を断った。「川瀬君がいるから大丈夫」そう言って和美は幸一と歩きだした。背後から「じゃあな」という昇の声が聞こえた。

幸一と和美はしばらく並んで歩いた。二人の家は方向が違った。次の路地で別れなければならない。路地の手前で和美が立ち止まって幸一を呼び止めた。

「ねえ、川瀬君。私と長谷川君のことどう思う？」和美が幸一に聞いた。幸一は何と答えていいのか分からず黙っていた。

「私、本当は長谷川君のこと好きでもなんでもないのでよ」和美はさらに続けた。

「何となくこんな風になっちゃって、嫌だと言えないままカップルみたいに言われているけど、そんなことないから誤解しないでね。

今日はありがとう。川瀬君と一緒に楽しかったわ」和美はそう言うのと、走って行った。路地を曲がったところで一旦、立ち止り、

幸一に手を振った。「バイバイ、また明日学校でね」

幸一は和美の姿が見えなくなるまで、その場で見送った。

三学期になった。幸一はまた席替えが行われると思うと憂鬱になった。ところが、担任の提案で卒業も近いから今のままの席で卒業を迎えようということになった。今のパートナーが気に入らない連中から反対意見も出たが、昇の一声で担任に従うことになった。幸一は今まで目の上のたんこぶだった昇の存在をこの時ばかりは称えてやりたいと思った。隣の席で和美も小さなガッツポーズをしていたのが印象的だった。

そして、中学生生活最後のバレンタインデー。和美が昇のことを

好きでないと分かっている、今年も和美は昇にチョコを渡すに違いない。そんな場面を見るのが嫌で幸一は教室を出ようとした。

その時、和美が大きな声で幸一を呼び止めた。

「川瀬君、ちよつと待って！ 渡したいものがあるの」和美は幸一の制服の袖を引っ張って、教室の教壇の前まで連れて来た。クラス中の視線が二人に集まった。

「三年分の想いを受け取って下さい！」和美はそう言って、チョコレートを幸一に渡した。

「おい！ どういうことだ？ 倉沢と長谷川がベストカップルなんじゃないのか？」そう呟く声が教室のあちこちから聞こえてきた。

教室の真ん中で、茫然と立ち尽くす長谷川昇。

「今まで、みんなの期待を裏切れないから義理でチョコあげたけど、わたし、あなたみたいなキザな人は好みではないの。でも、せっかく用意してきたから受け取ってちょうだい」そう言うと和美は今までのように義理で用意したチョコを昇に向かって放り投げた。

そのチョコは今まで和美が渡していたチョコとまったく同じものだったが、明らかに幸一の物とは比べ物にならないほど粗末に見えた。呆氣にとられているクラス名とを尻目に、和美は自分のカバンを掴むと、幸一の腕を引っ張って教室を飛び出した。

腕を組んで校庭を歩いて行く二人を教室な窓からクラスメイト達が見ている。

幸一は和美に聞いてみた。「どうしてボクなんだ？」

「そんなこと分からないわ。人を好きになるのに理由なんか必要ないでしょう？」和美はそう言ってほほ笑んだ。あの時と同じ笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8844q/>

最後のバレンタインデー

2011年10月4日20時38分発行